

# 宮沢賢治の仏教とはどのようなものであったか(上)

——「法華経」との出会いまで——

栗原 敦

はじめに

宮沢賢治の父政次郎の従弟関登久<sup>注1</sup>は、賢治より三歳の年下である。大正六年当時、人生の進路に迷い、悩んでいた関を賢治は曹洞宗報恩寺の尾崎文英のもとに連れて行ったが、関は尾崎との問答の内に感動して泣き出すといった経験<sup>注2</sup>もしたという。その後も身近に兄事し、大正九年には、賢治の後を追うように日蓮宗系の在家信仰団体である国柱会に入会して同信者となった人物だが、昭和八年九月の賢治逝去直後に、追悼文として寄せた「信仰の人宮沢さん<sup>注3</sup>」の中で、友人知己のもとに法華経を届けるといふ趣旨の遺言に対して、「本化妙宗教徒」（国柱会の信徒の意）として

「信仰の人宮沢さん」は「生き生きと表現され尽くしてゐる」と述べつつ、その生涯を見渡した上で、次のように記した。

宮沢さんの信仰は根柢<sup>マヅメ</sup>は大盤石であるにしろ、常に上へは流動されてゐる如く見えた。信仰に生きてゐたといへ、常に教義の上や社会上の問題等にふれては種々の疑惑が起り宮沢さんの心を暗くしたりした。はたからみてゐると基礎はゆるぎだしたのかとさへ思はれた。然しいざとなつては寸毫のゆるぎもなかつた。明瞭<sup>メイリョウ</sup>に実に明瞭<sup>メイリョウ</sup>に、それはあの遺言は証明してゐる。要するに宮沢さんの信仰は動脈硬化的信仰ではなかつたのである。

「法華経」との出会い以来、その末期まで変わることもなかった「法華経」信仰と、にもかかわらず、表面的には激しい動揺を思わせる実際の振る舞いが伴われずにはいなかった宮沢賢治の生涯の様相を指摘したものである。身近にいた同信の者ならではの評言であった。

父の手で書き記された遺言における知友への「法華経」配布の願いは、間違いなく宮沢賢治の生涯をかけた信仰の現れであろうし、ちょうど二年前、東北砕石工場技師としての業績で上京し、病に倒れた昭和六年九月二十一日に八幡館で記した両親あて書簡（遺書に相当。没後に発見されたもの）に見られる内容も、生涯を貫く「法華経」信仰の表現だった。そこには「どうか信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずお呼び申しあげお答えいたします。」とあって、「法華経」唱題への信仰の集約が示されている。宮沢賢治の仏教はこれに尽きるといってよいのかもしれない。

とはいえ、一般の者にとって実際は、その内容がよく分かるとも言いにくいところがある。関のいう「ゆるぎ」にみえるもの、「動脈硬化的」ではない生きた動きを必然としたものは何であったか。あるいは賢治に固有の、並外れた点、激しい振幅といった特質を具体的に押さえておくことが欠かせないのであるまいか。

関の記す「教義」が浮上してくる前提として、ひとまず、「法華経」信仰が深まり、「社会上の問題」への意識が広がる時期としての盛岡高等農林時代を先取りして、賢治においてその思想と信仰の骨格が整えられてゆく時期の基盤を捉えておくことにしよう。

大正四年四月、宮沢賢治は盛岡高等農林学校（農学科第二部）に首席で入学した。前年、進学の望みがないまま悄然と病的なまでに落ち込む姿を見、また二歳年下の妹トシを東京の女子大学校に進ませることにした父政次郎が、秋になって兄賢治の進学も認め、それ以後賢治が専心受験勉強に努めた成果であることは間違いない。とはいえ、中学校で学年が進むに従って成績が低下し、操行の評価も芳しくなく特及で卒業したことから見れば、驚くべき飛躍だった。

盛岡高等農林学校は高等農林としては全国最初のもので、明治三六年創設。遅れていた東北農業の振興に資する意図を含んでいた。農学科、林学科、獣医学科で編成され、農学科は第一部、第二部である。渡辺五六の回想に、彼が入学した年に農学科に「部制を設けて」第一部を「農学全般をやるもの」、第二部を「農芸化学をやるもの」と専門が分けられた（「僕の記憶に残る宮沢君」<sup>注4</sup>）とあるように、第二部ができたのは大正二年からで、賢治が卒業して研究生

となつた大正七年四月より農芸化学科と改称された。

賢治の高等農林学校時代を概括すれば、まず学業において、卒業まで優秀な学徒として一貫したこと、ついで地質調査を旨としつつも、中学時代以来続いていた山野跋涉を繰り返したこと、学内の文芸仲間との交流を深めて作品の制作・発表を行ったこと、絶えず仏教の研鑽を重ねていたことがあげられる。

学業は入学以来、級長、特待生（二年、三年）、旗手（三年）となるなど優等生で通したが、中学卒業後の闘病経験からか、健康には特段の注意を払い、試験前でも「早寝遅起」の生活ぶりだったという。重要な点は当時最先端の自然科学的知識を優秀な学徒として一身に浴びていたことである。物質の科学として、電子説（まだ理論的仮説であった）が登場した時代の化学の転換期を、体系と秩序を整えうる現象として実験的、理論的に実証できるという学問観と、さらに農芸化学として農業の実際に役立てうるし、そうしなければならぬという、みんな（人々、民衆）のための科学を求める姿勢とによって学び通したと見られることが注目される。「高等専門学校」に与えられた、専門性と現実社会との実際の接点の重視という制度上の性格は、思いの外後年の賢治の人生に深い影を落としている。また、見過ごされがちだが、社会の見方に関しても農村社会・経

済に関わる農政学等の分野からの刺激を受けたはずである。上級生、下級生を含めた友人たちの回想にも見られるが、誘い合つて、また単独で、休日を活用して盛岡周辺のみならず各地を調査、渉猟して歩いたのは、地質調査という学術資料の収集、知見の獲得のためばかりではなかつたろう。歩き方も、勉学に際しての健康への留意に反するほどの、徹夜登山、強行軍を辞さないもので、山野跋涉それ自体が、彼の天然自然との交流や融合体験を裏付ける意味をすでにもっていたのではないかと思わせる。また、中嶋信「同室の思い出」（注4同書）が記す、「鉱物等の標本採集」に行した際、見るとはがきに「短歌を二三首ずつ」書いて、自分宛に送っている、訳を聞けば、後で受け取つて「今日の気持ちを再度味わう」ためと答えたという挿話は、後年の「心象スケッチ」の先駆けのごとき文学的フィールド・ワークの原型にも見える。

中学以来の短歌制作は継続されたが、特筆すべきは、全国各地から集まった学生の中に、文学的表現に親しむ者が見出され、「校友会々報」への発表や学内同人雑誌「アザリア」の刊行へと結ぶ相互交流が深まったことである。孤立した自己表白だったものが、仲間を得ることで伝達の質や普遍性を深め、一気に思想や表現の高みを目指すようになる。連作短歌や批評意識を込めた断章的散文も記され、

後年の文学的営為の直接的基盤が形成された時代だといつてよい。

大正三年秋の島地大等編著『漢和対照 妙法蓮華経』

(明治書院、大3・8)との出会い以降、折に触れてこれを開き、読誦し、また経文を唱えていた賢治の姿は多くの友人によって回想されている。とはいえ、暗記していた「般若心経」を「その場で紙に書いてくれた」のをもらい、願教寺の夏期講習に誘われて「歎異抄」の講話を聞いた人(河上和吉「賢治君の学生時代」、願教寺にゆく者と「独り別れて隣の報恩寺に行つて尾崎文英の教えを受けていた」ことを証言する人(大谷良之「賢治君を思う」、タツピング牧師のバイブルクラスに誘われた人(鶴見要三郎「宮沢賢治君の思い出(一)」)。ともに注4同書)もあり、それらは、「法華経」を中心にしつつも、賢治が高等農林学校時代に探究していた志向の広がりや自ずから物語っている。

もちろん、この時代の賢治が若々しい理想に燃え、諸法実相、一念三千、法界成仏の理等を軸に「法華経」を信奉していたのは間違いない。それは大正六年九月の祖父喜助の死を踏まえ、卒業を前にして交わされた父との交信、大正七年三月に突如退学処分を受けた一学年下級の友人保阪嘉内との交信などの書簡群、「アザリア」発表作品等に

よって確かめられることであって、彼の「法華経」信仰が思想的な世界像として固まってくるための垣塙だったのである。

## 1 前史―宗教的環境

一旦遡つて、「法華経」との出会い以前の素地、幼少年期以来の宗教的環境とその意義を探っておかなければならない。

賢治誕生の明治二九年当時の宮沢家には、戸主喜助・キン夫妻、長男政次郎姉ヤギ、弟治三郎、妹ヤス(翌年岩田金次郎と結婚)がいた。賢治は政次郎、イチの長子だが、当主の祖父喜助にとつても初孫だった。イチが実家での「孫抱き」(生後百日目の祝い)を終えて数日後、賢治を連れて婚家にもどつた時、ここでも「孫抱き」の祝いが行われていたといふ。<sup>注5</sup>喜助は特段信仰に篤かつたわけではないようである。晩年の祖母キンは「ひたすら念仏をとなえていた」という(旧「校本全集」年譜)が、賢治との間に格別の関わりがあったようには伝えられていない。

ヤギ(1869-1912)は長男政次郎より五歳年長の長女、賢治にとつて伯母にあたる。賢治は彼女のために、「雨二モマケズ手帳」の七七、七八頁に「為菩提平賀ヤギ」とし

て唱題「南無妙法蓮華經」を七行にわたって書写している。ヤギは大正元年一二月一日に没しているので、その祥月命日に記載したものであるまいか。篤信の家では、朝の勤行などに、その日が命日である先祖・近親者等の菩提を弔うのが一般で、それに従ったものと思われるのである。

ヤギは明治二十二年宮沢直太郎（二代右八）に嫁したが、不縁となり二六年実家に戻っていた。誕生した賢治をかわいがり（小倉豊文によれば、「むしろ、あまやかしていた。」）「家庭教育に厳しい父には、相当気になっていた程であったという。』『宮沢賢治「雨ニモマケズ手帳」研究』筑摩書房、平8・5）、「寝かしつけながら正信偈や白骨の御文などを誦んで聞かせ」、三歳のころの賢治も暗誦してこれらをとなえたという（注5同書）。ヤギは三五年四月平賀常松（のち円治を襲名）と再婚した。「尋常三四年の頃、賢治さんは画用紙にお仏様をかいたり、粘土で仏様を造ったりするのが好きでした。この伯母さんは、賢治さんの造った仏像を、久しい間仏壇に安置して礼拝していました。」（注5同書）という。

ヤギはのちに病を得て、宮城県宮城郡七ヶ浜村菖蒲田の大東館に転地療養した。菖蒲田は松島湾に面する漁村だが、海水浴場、保養地として知られていた。賢治は明治四五年盛岡中学四年の五月二七日から二九日にかけて石巻、松島、

仙台、平泉修学旅行に参加した際、教師の許可を得て塩竈駅東南約七キロの菖蒲田に伯母を見舞った。その折りの様子は、帰盛後の父宛書簡（三〇日付）に詳しく、後年の「文語詩篇」ノートにも記述が見られる。書簡には「塩竈にて無理に先生の許可を得その夜の八時半」までに仙台で合流する約束で、一人宛もなき道を行き、寂しさに「無意識に」「口に称名の起り」、一時間後ようやく村に到着とある。六軒の宿を順に探すつもり「まづ渚より岩にかけられし木の階を登り大東館と書かれたる玄関」をたたくが返事がなく、東に回ってランプの窓で尋ねようとしたところ（伯母の部屋だったという驚きの面会となった。寂しい療養生活を慰め、交わされた話題は「あちこちよりの手紙を見せられ申し候、叔母さまは幾度も幾度もおちいさんや父上のお心に泣きたりと申され候」、様子は「ずいぶんやせ申し候、血色はよろしきやうに見え候へども一日の食べ物土鍋一つの粥のみ」という質素さだと詳しく報告、ついに一泊（「この夜咳の声に二度ばかり目覚め申し候」、翌朝九時仙台着、十二時に一行と合流したことが記されている。大東館のある菖蒲田眺望崎は「文語詩篇」ノートでは「松原、濤ノ音、曇リ日 磯ノ香」「伯母ト磯ヲ歩ム。夕刻、風、落チタル海草、岩ハ洪積」というように記されていた。文語詩化された作品は残されていないが、半年後

の十二月に亡くなったヤギの忘れがたい記憶だったことは間違いない。

前掲注五佐藤同書には、昭和二四年の賢治十七回忌を前にして賢治父政次郎に尋ねた記事があるが（インタビュ役の須山は佐藤の仮名）、政次郎は賢治没後の名声の高まりが浮ついた讃仰に流れることを戒めて、幼年時「賢治が『正信偈』や『白骨の御文』などを唱えたというようなこととを、すぐに賢治が後年になって進んだ路と結びつけてしまふのは無理なのですよ。」と云って、ヤギの感化でそうなったのは「環境からきた口まね流とでも言った方がいいようなもので、真の仏教というようなのは考えられませぬね。」と述べている。厳父の面目躍如といったところで、神童伝説や、いたずらな崇め奉りへの諫めであろう。とはいえ、政次郎も「何代となく引続いて培われて来た仏縁」から考えれば「何かの因縁」ということを全く否定してはいないごとく、弟清六が、父がときどき「賢治には前生に永い間、諸国をたつた一人で巡礼して歩いた宿習があって、小さいときから大人になるまでどうしてもその癖がとれなかったものだ」としみじみ話したと記したように（「兄賢治の生涯」『兄のトランク』筑摩書房、昭62・9所収）、幼年の柔らかな感性に与えた伯母ヤギの感化が賢治の生存感覚の基本ベースを培ったということは否定できない。彼自

身そのことを、生涯を貫く仏縁として大切に感じ取っていたことの現れが、かの「雨二モマケズ手帳」での唱題による「菩提ノ為」の祈りだったというべきである

さて、次に父政次郎の感化を確かめるところだが、その前に母イチの人柄を見ておこう。総じて、母や伯母ら女性たちに受け継がれた、日常に溶け込んだ浄土真宗の伝統的な感覚が、幼少年期を包んでいたと思われるからである。

母イチを語って旧「校本全集」年譜は「性来の美質というか、心に春風のようなゆとりをもち、その母サメの徳をうけついで限りなくやさしかった」として、イチは子供たちを寝かしつけながら「ひとというものは、ひとのために何かしてあげるために生まれてきたのす」と語り聞かせたという。サメ（通称サキ）は「生まれたままのようによく、純な心をもち、仏心篤く多くの人を助けたことで知られている」というから、イチ次妹ヨシ（通称セツ）の仏教信仰や、明治三九年の大沢温泉夏期仏教講習会の折りに暁鳥敏が書き留めた末妹コトの信念（後出「法華経との出会いとその意義」の項参照）なども、サメの薫陶が娘たちに受け容れられていた証とも考えられる。いずれにせよ、賢治の持つユーモアの感覚、他者への共感や同情心、奉仕への切実な思いなどの源が母イチに由来することは容易に想像できるし、その生涯でいかなる困難に出会っても、生き

ること自体を否定したふしが見あたらないことの理由に、母の愛情豊かな人格と幼年教育を見出しでも不当ではないだろう。

## 2 父政次郎の信仰

では、父政次郎の感化はいかなる特質を持っていたか。

賢治父政次郎は、若くして父喜助の家業である質・古着商に従い、十五、六歳で代理をつとめる器量があり、時勢に応じて経営の転換をはかり、関西・四国方面まで買い出しに出かける積極性もあった。一方、仏教（浄土真宗）の信仰に生活の全てをゆだねる篤信者でもある。明治二八年盛岡仏教会館で高橋勘太郎（1869-1936）と出会い、三五年にトラホーム治療のため上京した際、清沢満之（1863-1903）を訪問しているが（旧「校本全集」年譜参照）、いずれも商用等の間にも信心の深化を求めていた様子を伺わせる事柄である。

高橋勘太郎は、盛岡の老舗木津屋に奉公し、当主池野権治に写経を命じられて仏教に開眼し、「諳んぜぬ仏典とはなかりけり前垂れ掛ける商人なりしが」（小田島孤舟）と歌われた在野の碩学で（高橋昭『前垂れ菩薩 高橋勘太郎の生涯』たかかん書房昭62・5）、政次郎とは四十数年

にわたる法友として親交を続けた。島地大等編著『漢和対照 妙法蓮華経』を刊行早々の「大正三中秋十二日」付で政次郎に贈り、これを読んだ賢治が法華経に初めて震撼されたのであり、また、のちに息子賢治と夫政次郎の間で法論が絶えないことを心配した賢治母イチが高橋のもとに相談にいつて、同じ仏様の教えだから心配しなくてよいと慰められもした。高橋の仲人赤沢亦吉（1867-1951）は、赤沢号という文具商（のち、杜陵印刷、盛岡信用組合を創業）だが、盛岡仏教興徳会、信行会などをおこした在家仏教徒で、政次郎は賢治が明治四二年に盛岡中学に入学する際、保証人を赤沢に依頼している。政次郎の盛岡における信仰上の人脈の一端が伺える。

政次郎が清沢満之との接点を得た具体的な経緯はわからない。だが、時代は、明治維新に伴って布告された神仏分離令を機に生じた廃仏毀釈の激動を経て、大教院による宗教の国家的一元的統制のねらいも真宗四派の脱退などにより一旦は新規まき直しとなり、仏教各派の側でも改めて再生運動に取り組み、井上円了に代表される西欧哲学との接触を踏まえた再評価、村上專精の「大乘非仏論」の衝撃等も経て、新時代の青年たちが自らの社会的位置の確立や自我の悩みの克服を求めて仏教に関わっていた時期である。政次郎自身、親鸞の「末燈抄」における「自然の浄土」、

「浄土の信仰の極致ハ無上仏になる事」、「無上仏とハ形なき仏の事である形なき様を知らせんとて阿弥陀仏とも無上仏とも聞き習ひて候」というような文字が腑に落ちるまでに多年苦勞し、それを巡って「宗門の先覚者に幾度び御迷惑を掛けた事か」（小倉豊文あて書信<sup>注6</sup>）と回顧したほどで、西欧哲学に学び、真宗大谷派内部の改革を問うところに始まった清沢の、信仰の内面化を求める革新に注目したことだろう。少くともそれは、明治近代社会の形成期にあつて、自身の死生観を自らの個の自覚の上において改めて選びとつたものであり、おそらくこのようなものであつてはじめて彼にとつての「真の仏教」の名に値いするものだった。賢治が向き合つた父の信仰の質をここに見定めておきたい。

一方、花巻でも明治三十年代初めから有志が集つて仏教振興をはかつていた。平野立乾、斎藤新兵衛、照井孝介らが三二年花巻両町で仏教團教会を結成した。おそらく、この頃には、阿部晃らと共に政次郎は仏教四恩会で活動していたと思われる。仏教團教会のメンバーと重なつて、平野や照井庄六らが花巻郊外の大沢温泉を会場に「夏期講習会」を開催したのも三二年である。当初は夏期休暇中の学生・青年を対象とした修養目的の学術講習会だったが、少なくとも三五年には仏教講習会へと性格を移し、松岡忠一、林正因（妙円寺住職林正観子息）らを幹事として開催、招

聘の講師は町内でも講演した。政次郎はこれに協力し、やがて宮沢家挙げての関わりを持つことになる。三五年の講師は三好愛吉（二高教頭）、麻生道戒（妙心寺講習所長）、三六年は同じく麻生道戒、楠龍造だが、すでに三五年に清沢を訪ねている政次郎に浩々洞同人の楠は旧知だろう。三七年は近角常観、釈宗活で、近角は「歎異抄」、釈は「毒語心経」を講じている。近角は西欧留学中に留守宅を浩々洞に提供、帰国後は求道学舎を始めている。清沢、暁烏と並んで、「歎異抄」の近代における紹介者であり、宮沢一族との交流がつづく<sup>注7</sup>。三八年は杉谷泰山（二高教授）他。

翌三九年は幹事鈴木卓苗、講師暁烏敏で、政次郎家およびイチの実家の人々を含む宮沢一族挙げての講習会となつた。実情は『暁烏敏日記』（暁烏敏顕彰会）に詳しいが、後々まで続く政次郎と暁烏との交流は、栗原敦編注「金沢大学暁烏文庫蔵 暁烏敏宛 宮沢政次郎書簡集」（「金沢大学文学部論集」1。『日本文学研究資料叢書 宮沢賢治Ⅱ』に再録）を参照されたい。以後、講師として迎えられたのは、判明している限りでも多田鼎、斎藤唯信、村上專精、祥雲確悟（推定）、島地大等、楠原龍誓（予定）、尾崎文英、椎尾弁匡、桜井肇山らである。賢治はこの全てに参加していたわけではないが、花巻や盛岡での接触もあり、その精神形成に深い感化を与え、多くの導きの糸になつたことは疑

い得ない。

それでは、少年期の賢治が受けた浄土真宗の感化は具体的にどのような姿をもっていただろうか。

### 3 賢治と「歎異抄」

賢治の親鸞との関わりを伝える最も早いものは、先に述べたように、伯母ヤギが唱える「正信偈」や「白骨の御文章」を聞き、三歳の頃にすでに暗誦していたという言い伝えであった。「正信偈」すなわち親鸞の『教行信証文類』末尾の「正信念仏偈」で、「白骨の御文章」すなわち蓮如の『御文』「五帖御文」の「第五帖」で、身近にそれらが唱えられていたという家庭の様子を伝えるものだが、これらの域を越えて、資料的に確認できるのは、大正元年、盛岡中学四年生、十六歳の十一月三日付父政次郎あて書簡にみられる「歎異抄」（歎異鈔）である。

毎月恒例の会計報告を主眼とする手紙だが、静座法指導の佐々木電眼に予約金一元を支払ったことの説明に合わせ、「生意氣」と評されるかも知れないとか、文学趣味、短歌制作への注意、危険思想接近への心配などに対する予防線をはりつつ、「御心配御無用に候 小生はすでに道を心得候。歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候 もし

尽くを小生のものとなし得ずとするも八分道は得会申し候 念仏も唱へ居り候。」と弁明する形で登場する。

「第二頁」は「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせ、往生をばとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもひたつこゝろのおこるとき、すなはち、攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。」に始まる第一節をさすだろうから、父への報告に同じ立場に立つ者としての自らを示そうとして「歎異抄」が使われていることが解る。「弥陀の誓願」は衆生の救いが成らなければ仏にならないとの誓いであり、それを信じて応ずるのが衆生の「念仏」（唱名・称名）に他ならないのだから、「念仏も唱へ」ているのは、信仰の実践にあたる。書簡の続きには「仏の御前には生命をも落すべき準備十分に候 幽霊も恐ろしく之れ無く候 何となれば念仏者には仏様といふ味方が影の如くに添ひてこれをお護り下さるものと承り候へば」云々とあつて、恐ろしきものの例が「幽霊」というあたり、少年の関心や人生経験の範囲にとどまっているとはいへ、全てをなげうつつ覚悟の表明は若者らしい至純さを感じさせるし、安心の根源への帰依は伝統的な真宗の信心の素朴な表現の枠内にあるように見える。「歎異抄」第一節の後段は、「弥陀の本願」に漏れはなく、ただ「信心」すなわち「念仏」のみが必要だということの確認と、後の第三節でいわゆる悪人正機説を展

開することにつながる。「弥陀の本願をさまざまぐるほどの悪」はないという言明だが、これに賢治がどう反応していたかは解らない。

ところで、現今では親鸞と言えば唯円の編になる「歎異抄」がすぐに思い浮かべられるが、これは蓮如以来一般門徒には禁書扱いで、一部僧侶がひもとく以外に広く知られることはなかった。明治になって暁烏敏や近角常観らが世間一般に積極的に広めていったものである。

野本永久によれば、「精神界」に拠った暁烏が「歎異抄」の悪人正機説の精神を踏まえて議論の発端を開いたのは、「精神界」明治三四年一二月号の「精神主義と性情」と、続く「昌平なる生活」である。無署名の社説だったため、清沢滿之の筆と思われたが、清沢は一言も弁明せず、非難にも淡々と応対したという（野本永久「暁烏敏伝」大和書房、昭49・6）。「倫理以上の信仰」こそが本質であることを展開したのだが、実際、暁烏が「歎異抄」に出会った契機は清沢から「読めといって授けられたのではなかった」、自身の青春の性欲の苦しみから「自分と同じ道を歩いた先人」を求め、「性欲そのままに救われた前例」として「歎異抄」第三節に出会ったのだという。「親鸞の苦惱に直入しての共感」による発見に他ならなかった（松田章一「暁烏敏 世と共に世を超えん」上・下、北國新聞社、

平成9・12&10・3）。暁烏の「歎異抄を読む」の連載が「精神界」で始まったのは三六年一月からで、これが一般の人々が「歎異抄」に触れる最初といいいい。三五年に清沢のもとを訪ねた政次郎がすぐに「精神界」を購読したかどうかは不明だが、大沢温泉夏期仏教講習会でも、三年の講師に迎えられた近角が早くも「歎異抄」を講じていた。

いずれにせよ、清沢も暁烏も近角も深く宗門の中に根を下ろしながら、その枠に収まりきらない思想と生涯の展開を持った信仰者であった。いわば、父政次郎は当時最前線の宗教的覚醒である「歎異抄」理解を受容していたのである。三九年の大沢温泉夏期仏教講習会で暁烏が講じたのは清沢の絶筆「我が信念」<sup>注8</sup>で、その後全国各地で「我が信念」を講ずることになる実に最初の機会だったが、この講習に家族挙げて参加した中の賢治は十歳、まだ思想的内容をそのまま理解できる年齢ではなかったとはいえ、清沢および浩々洞メンバーの「精神主義」と「歎異抄」理解が重なる思想的水準で講習会を準備し、親しく交友を結んだ父のもとで少年期の賢治の自我形成が行われたわけである。この意義の如何は、まだ十分解明され尽くしていない。

多少くり返しを伴うが、ここで改めて暁烏敏について紹介しておくべきだろう。

暁鳥は、石川県石川郡出城村（現松任市）出身（1877-1924）、浄土真宗大谷派明達寺一八世住職。個の自覚に根ざした仏教の近代化を推し進めた清沢満之を師と仰ぎ、種々の試練を超えて、絶対的自由の意義を示し続けた宗教者。教団の伝統的通念からは絶えず異端とみなされながら、敗戦後の最も困難な時期には宗務総長の任にかりだされ、教団経営の危機を同朋運動で立ち直らせる役を果たした。非無、青鬼堂なども号し、俳句、短歌をよくし、詩集『迷の跡』（明治三六年）もある情の人であった。

近角常観の欧州視察中清沢満之が預かっていた東京本郷区森川町の私塾に、月見覚了、原子広宣、暁鳥敏、多田鼎、佐々木月樵らが集って浩浩洞と命名したのは、明治三三年一月である。一般の人たちに堅苦しくないことばで仏教の真意を伝える雑誌を作りたいという暁鳥の提案をもとに、主幹清沢、編集多田、会計佐々木、署名人並びに庶務暁鳥で翌三四年一月「精神界」を創刊。清沢による巻頭言「精神主義」が旗印となった。論説、研究、翻訳、紹介、感想、報道（各地のたより）など多彩な構成だったが、講話の内容が平易な口語体で掲載されるなど、親しみやすさ、わかりやすさへの配慮が生きて働いていた。「精神界」の三年一月号から連載した暁鳥の「歎異鈔」を讀む（〜四三・一二）は「歎異鈔」を一般人に紹介した最初のものと

いってよい。近代におけるこの書の再発見者として、悪人正機の精神を、絶対他力の救済による安心、すなわち「倫理以上の安慰」に見出したのである。

東北岩手の地と暁鳥の縁は明治三六年に始まる。前年三年の東北地方大凶作に対して、真宗大学丙申会から慰問行の要請を受けてこの年四月に東北饑饉慰問の旅を行い、多くの法縁が結ばれた。盛岡の千原田空の紹介で、県北二戸の浄法寺村では土地の有力者小田島五郎の助力を受け、高橋勘太郎にも出会った。これを機縁として浄法寺村福徳会が結成された。小田島は花巻在の豪農小野崎家出身で、県内有数の山林地主小田島家に入籍した。高橋は盛岡出身、前述の通り、奉公先の主人の導きで仏教に目覚め、やがて独立して小間物の行商を始め、県下を商売しながら教えを伝えた在家の篤信者である。二九年から浄法寺村に居住していた。暁鳥は帰途仙台で小田島の甥佐々木哲郎（二高在学中。弟は三田憲）にも会った。佐々木は翌年東京帝国大学に進み、近角が帰国後開いた求道学舎に寄宿し暁鳥と親しく交流する。これらの法縁が重なって、三九年夏七月から八月にかけて約一ヶ月に及ぶ暁鳥の岩手仏教講話の旅が実現した。花巻川口町光徳寺での五回の講話、浄法寺村での七回の「歎異鈔」の講話、花巻郊外大沢温泉での夏期仏教講習会での清沢伝を踏まえた清沢の絶筆「我が信念」を

中心とする十日間の講話、盛岡での二回の講演である。とくに、大沢温泉での講話には宮沢一族あけて参加、一〇歳の賢治もその中であつた。寝食をともにして、講後の懇親の楽しさも深い印象を残した。以後、敗戦後の昭和二三年まで、暁烏が花巻、大沢を訪れたのは十数回を数える。盛岡、浄法寺のみを訪れたこともあつた。

賢治父政次郎の暁烏あて書簡からも伺えるように、暁烏における種々の思想的試練を超えて両者の間には深い親交が重ねられた。明治三九年前後の暁烏は、三六年六月に没した清沢の最後の信念を伝えて、自身「罪悪も如来の恩寵なり」とする恩寵主義と呼ばれる時代にあつた。その自覚は伝統的、世俗的既成概念、無意識的自己防衛の覆いを引き剥がしつつ、熱狂的な感激をもたらず一方で、四二年「異安心」（異端的教義理解）だという反撃の嵐を巻き起こした。大正四年、妻の死後に起こした女性問題の暴露から「精神界」の刊行責任者を降り、浩々洞を去つて明達寺に戻る。この暗闇の時期にいっそうの信仰的深化を遂げ、九年の『更生の前後』に示される独立者の宣言により復活。一五年一二月から翌昭和二年七月にかけてインド、ヨーロッパ十数カ国を旅行。戦中はかつての非戦論者が戦争協力者とも見られうる衆生との共存共苦の歩みを選択し、敗戦を迎えた（栗原敦「序景 宮沢賢治」『宮沢賢治 透明

な軌道の上から』新宿書房、平4・8刊所収、高橋昭『前垂れ菩薩 高橋勘太郎の生涯』（前出）、松田章一「暁烏敏と宮沢賢治」『暁烏敏の挑戦』北國新聞社出版局、平17・2刊所収を参照）。

宮沢賢治自身が暁烏に言及したのは、「アザリア」第五号（大正七年）発表の「復活の前」と、詩篇下書稿「霜林幻想」に見るばかりだが、その影響は決して見過ごすことは出来ない。「異安心」問題以降の暁烏が郷土石川県で与えた感化を暁烏の若き同信者を通じて体験した石堂清倫は、その意義を自由への希求と社会的環境の中での行いの関わりに見出している（「詩人の言語」『わが友 中野重治』平凡社、平14・4刊所収）が、賢治が暁烏から得たものを考察する上で貴重な観点になるだろう。

ちなみに、大正十年に家出上京した賢治が、自信の関徳弥にあてて出した七月一三日消印の手紙の中で、自身の芸術と信仰を巡る困難な思索を伝えようとして、当時のベストセラー作家として批判的なニュアンスでその名声に言及した島田清次郎は、金沢で暁烏とその若き同信者藤原鉄乗、高光大船たちが展開した既成観念からの解放を求める激しい覚醒運動の波を浴びたひとりだった。覚醒のあとの自己を救い主とする傲岸な自己主張は、一転してたちまちのうちに転落の途をたどつたのであつた。

暁鳥が持った大正期知識人たちとの交流の扱がりは、巡りめぐって、昭和三年六月一九日の日付が付された賢治の詩稿「神田の夜」に登場する「Shuzo Takata」の關係にも確認できるが、これについては拙稿「資料と研究・ところどころ⑩」（『賢治研究』113号、平成23・3）を参照。

## 5 法華經との出会いとその意義

伝統的な浄土真宗の篤い信仰が日常的に周囲に満ち、それが講習会の講師らとの接触によって育てられていく様子の一端は、たとえば明治三九年の大沢温泉夏期仏教講習会に講師として招かれた暁鳥敏が賢治父政次郎の間に答えた妻イチの末妹コト（この年一二月に一歳をむかえる）のこたばを、「心は円きもの光るものにして内に仏あり。」「妾は身体は弱けれど心は強し。仏在せば也」（「人生の目的は」母さんにたのまれて生れたり。仏、妾に行つて来いと申されれば生れたり。この生に來れるは仏をほめ、世の人に平和を与へんが為也」と、日記の表紙裏に記していたことから伺われる。暁鳥は「少女の信、嘉すべきかな」と讚えているが、この一歳年上の叔母の信は同じ講習会に参加していた賢治と妹トシ兄妹のそれでもあっただろう。中学時代の賢治の信仰がおおむねこの延長線上にあっただ

ろうことは、先に触れたように、明治四五年五月三〇日付「政次郎宛書簡で心細さに「無意識に」「称名」したことを記し、一月三日付書簡では「歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」と表明していることよって理解されよう。

中学時代の賢治が、学年が進むにつれて学業を怠り、好きな教科以外には身を入れないようになっていく事情は、後に本人が語ったという、中学校だけで終わらされる事情をうけてのことである。当地の名門盛岡中学では卒業生のほとんどが上級学校に進学する中で、すでに中学進学時にも商人に学問は必要ないという祖父の反対にあつて<sup>注10</sup>いたから、進路を閉ざされる思いは多大な心的負担を与え、捨て鉢な態度にもさせたのであろう。成績は八八人中六〇番という席次で大正三年三月卒業（『卒業生調』に「特及」とある）、卒業後、調子が悪かった鼻の手術を受けるが、術後数日して発熱、疑似チフスの疑いをもたれ、一ヶ月あまりの入院加療となり、退院後帰宅して回復はかばかしくない病後を養う。入院中看護婦への初恋という出来事があるが、退院後の心境は当時の短歌「友だちの入学試験近からんわれはやみたれば小き百合堀る」（『歌稿（A）』）にも伺われる。暗い病後の鬱屈した店番生活が続くが、この中で法華經との出会いが果たされる。

この年の秋、父政次郎に法友高橋勘太郎から贈呈されていた島地大等編『漢和対照 妙法蓮華経』をたまたま賢治が読み、「その中の「如来寿量品」を読んだときに特に感動して、驚喜して身体がふるえて止まらなかつたと言う。」(宮沢清六『兄のトランク』)。見返しに墨書された贈呈日付は「大正三中秋十二日」とあり、この中秋を新暦の九月として「九月十二日」と見ることもできるが、また旧暦八月とすれば「十二日」はこの年の場合新暦十月一日に相当する。賢治が読んだのはそのいずれか以降である。当時、「法華経」もまた専門の僧侶が漢訳経典として学び音読するもので、一般人が訓読するのに適した書物は山川智応訳注『和訳法華経』(明治四五年一月、新潮社)があったとはいえ、一般向けとしては他にほとんど見あたらなかつた。上下段に漢和を対照して掲げ、法華大意、略科、字解等を付したこの書は新鮮に受け止められ版を重ねた。編者島地は島地黙雷の法嗣子で盛岡の浄土真宗願教寺住職、天台学の学僧。明治四四年の大沢温泉夏期仏教講習会の講師として迎えられ、その折は「大乘起信論」を講じた。賢治は病気の父の命で途中から参加、後年の「文語詩未定稿」に収録された「講后」がこの時の体験を振り返っている。思想的内容として、この講話をどのように受けとめたか、具体的に確める材料はないが、何らかの感銘をもって

受容した若ものの興奮が振り返られているように見える。<sup>注11</sup>

以来親しみある島地の編纂から自然に繙読につながったと思われるが、この経のどこに激しく撃たれたかは、直接の言明が残されていないため、種々の解釈を呼んでいる。しかし、進学の可能性もないまま、望まない家業を背負わねばならず、病後の体調の回復もはかばかしくなく感じられる、まさしく自己が最も卑小に思われ、抑鬱に閉ざされていた時期に、「如来寿量品」を中心とする永遠の宇宙的存在の実感に出会って、救済され飛び立つ思いを味わったのではなからうか。感覚的な実感としては、それは、従来の「弥陀の誓願」の対象は無量であり、漏れなく全ての衆生を救済する、そのことへの信頼を信ずることとさほど変わるものではないかもしれない。その証拠に、特定宗派への帰依という構図は、盛岡高等農林学校卒業まで具体化しないのである。しかし、少年期から青年期にかけての世界認識や社会的諸関係との関わりを深めた中で背負った苦悩の目覚めである。これを解放してくれる存在と論理の実感が、改めて新たな体験として得られなければならなかつたということであろう。個の自覚の上に立つ宗教的自覚を確立していた父の懐の中から羽ばたき出て、賢治自身己れに独自の宗教的自覚を確立するべきものでなければならなかつた。

\*

賢治の法華経信仰とこの後に入学した盛岡高等農林学校で学んだ近代科学の世界観、物質観等は矛盾するものではなく、むしろ積極的に融合・統合して、以後の賢治の生涯を築き上げていくことになったと思われる。小倉豊文が関登久也の証言として伝えるところによれば、賢治はその後姉崎正治の『法華経の行者日蓮』（大正五年十月、博文館）によって日蓮の事績にも知識を深めていったという（『宮沢賢治「雨ニモマケズ手帳」研究』）。

法華経との出会いが、日蓮信仰や国柱会への入会へと結びつく経緯にはまだ不明なところがあるが、国柱会入会を知らせたと見られる保阪嘉内あて書簡（大9・12・2）に「日蓮聖人」への帰依も記されている。

救済としての宗教の性質を中心とする浄土真宗の阿弥陀信仰、これに覚（覚醒）の宗教としての性質を中心とする禅や唯識の信仰とが交錯し、心身体験や自然観が諸法実相観と無矛盾なものとして重ねられ、やがて社会的使命感が奉仕と菩薩道の実践として地上を生きる意味になる道行きがこのあとつづけられる。

注1 賢治祖母キンの異母兄である関徳太郎の次男、本名徳弥。

一八九九（明治三二）年生、一九五九（昭和三四）年没。政次郎末妹ヤスの長女ナヲと一九二三（大正一二）年に婿養子縁組で岩田姓となる。関登久也は筆名。

注2 関登久也『賢治随聞』（角川書店、昭45・2）

注3 「岩手日報」（昭和八年十月五日夕刊）。「宮沢賢治氏追悼号」に森さん（佐一、惣一、荘己池）から「あなたは信仰の人宮沢さんに就いて書いてくれ」と言われて執筆したものの。

注4 川原仁左エ門編著『宮沢賢治とその周辺』（同刊行会、初版は昭47・5。ここでは改訂版、昭48・4による）

注5 佐藤隆房『宮沢賢治』（富山房。初版は昭17・9だが、増補・改訂が続く。ここでは昭26・3（第四版）による）

注6 栗原敦「小倉豊文の宮沢賢治研究」（『実践国文学』第七十二号、平成十九年十月）に掲出した昭和二十三年十月十五日付書簡。小倉の問いに対して、自身の信仰の経緯を応えた部分にある。

注7 政次郎や磯吉の交流が知られていた。近年岩田文昭・碧海寿広らによる近角あて書簡の紹介があった。大正四年に上京以後のトシ書簡も含まれている（『宮沢賢治と近角常観―宮沢一族の書簡翻刻と解題』「大阪教育大学紀要 第1部門」第59巻第1号、平22・3）。なお、その

後、翻刻への修訂が追加されている。

21・10）を参照されたい。

注8

花巻川口町の光徳寺での五回の講話は『歎異鈔』の概要を語りて他力信仰の味はひ」を語っている。

注9

最近、山本伸裕『精神主義』は誰の思想か』（法蔵館、平23・6）が刊行されたように、「精神界」における清沢の執筆とされる文章を洗い直し、暁烏他の同人による色付けを抜き去ろうという試みがある。共感できることながら、一方、暁烏は早くから自分に責任のある文章は明らかにしていたのであり、依然として問題は、（救い）の宗教として、果して恩賜主義の何が問題であったのかということなのである。

注10

祖父喜助個人の考えというより、商家としての当時一般の慣習的な考え方といえよう。賢治の身近には、盛岡中学で一学年上の橋本英之助がある。母方の祖父善治の弟喜七（橋本家へ養子縁組。橋本家は善治妻サメの実家）の長男。喜七が早逝したこともあり、祖父の名を襲名することが決っており、卒業後ただちに家業に従うが、賢治は英之助の卒業に際し、記念の写真に彼を励ます短歌五首を添えている。他人事とは思えなかったことの表れだろう。

〔本稿は、国際日本文化研究センターの共同研究会（「文学の中の宗教と民間伝承の融合―宮沢賢治の世界観の再検討」）のゲストスピーカーとして、平成二二年九月五日に報告したものの前半部分に拠っている。共同研究の報告集に寄稿すべきところだが、それには間にあわせることができなかった。なお、内容としては、『宮沢賢治イーハトヴ学事典』（弘文堂、平22・12）において分担執筆した関係項目と重なって、それらを適宜修訂し、再編成している。〕

（くりはら あつし・実践女子大学教授）

注11

拙稿「資料と研究・ところどころ⑥辞・事典のこと、宮沢賢治の「大乘起信論」など」（『賢治研究』107号、平